FLORA KANAGAWA

Mar. 15. 2006 No.61

神奈川県植物誌調査会ニュース第 61 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
http://nh.kanagawa-museum.jp/~kana-syoku/
e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195

ハチジョウシュスラン. 武山 2005 年 9 月 21 日撮影.
詳しくは本文 756 ページを参照してください.

大森雄治：三浦半島で再確認されたウバメガシ自生地 …… 752
大森雄治：鎌倉市七里ガ浜のエビアマモの個体数の推定 …… 754
三浦ブロック会員・三浦半島植物友の会：横須賀市南部，武山の植物相調査の概要 …… 756
秋山幸也：カワラノギク 2005 年も相模原市で咲く …… 757
勝山輝男：コバノミツバツツジが藤野で採集された …… 758
木場英久：ヒトツノコシカニツリ …… 758
木場英久：ヒメコヌカグサを再発見 …… 759
木場英久：テッポウユリ類の帰化植物 …… 760
田中徳久：日本のスゲ，ついに刊行 …… 762
事務局：総会のお知らせ …… 762

三浦半島で再確認されたウバメガシ自生地

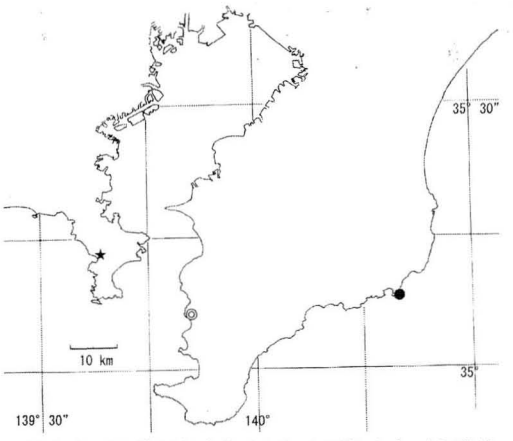
（大森雄治）

ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* A. Gray は，日本では従来神奈川県（三浦半島）以西の太平洋側に分布するとされてきたが，最近房総半島で2ヶ所，勝浦市八幡岬（大野 1998）と鋸南町岩井袋（山井ほか 1998; 原ほか 2000）の自生地が確認された．これを機に，房総半島でウバメガシ林の調査をされている原 正利氏（千葉県立中央博物館），伊豆半島などで同様の調査をされている磯谷達宏氏（国士舘大学文学部）から，三浦半島の自生地の再確認をしたいとの依頼を2003年春に受けた．

三浦半島の産地としては，これまで城ヶ島と横須賀市浦賀（桝田 1957），および横須賀市林（現，横須賀市御幸浜）（大谷・柴田 1971）の記録がある．2001年には横須賀植物会の方々が，1966年の分布調査記録（神奈川新聞 1966年11月8日朝刊「"熱帯性植物"どっさり，横須賀市林教育隊の敷地内で」；大谷・柴田 1971）に基づき，海上自衛隊横須賀教育隊敷地内にある通称岩崎山で植物分布調査をされ（八田羽 2002），ウバメガシやムクロジなどを再確認され，その折の標本を博物館でいただいた．

そこで横須賀植物会の相澤エイ子さんを通じて，教育隊広報部に調査の許可を依頼したところ，快くご協力いただくことができ，2003年6月6日に，原さん，磯谷さん，内山慶之さん（国士舘大学大学院生）と私の4人で，御幸浜のウバメガシ林を調査した．併せて，これまで記録のある城ヶ島，浦賀東叶神社の調査も行った．ここではその概要を報告する．

御幸浜岩崎山　1966年11月8日の神奈川新聞の記事では，調査のいきさつが書かれ，ムクロジ・アメリカデイゴ・ヤマモモが南方系の植物として掲載されているが，ウバメガシの記事はない．大谷・柴田氏が1966年の調査結果としてまとめられた植物目録では，「ウバメガシは海岸側に散点している」（大谷・柴田 1971）とあり，横須賀市内の天然記念物をまとめた報告には「海岸の低い丘には数本のウバメガシが見られるが・・・」（大谷 1972）と記されているので，これは，今回植生調査を行った群落ではなく，西側の小丘（通称御幸が丘）に見られた植栽と推定される株と思われる．



三浦半島（★横須賀市御幸浜）と房総半島（●勝浦市八幡岬、◎鋸南町岩井袋）のウバメガシ自生地．

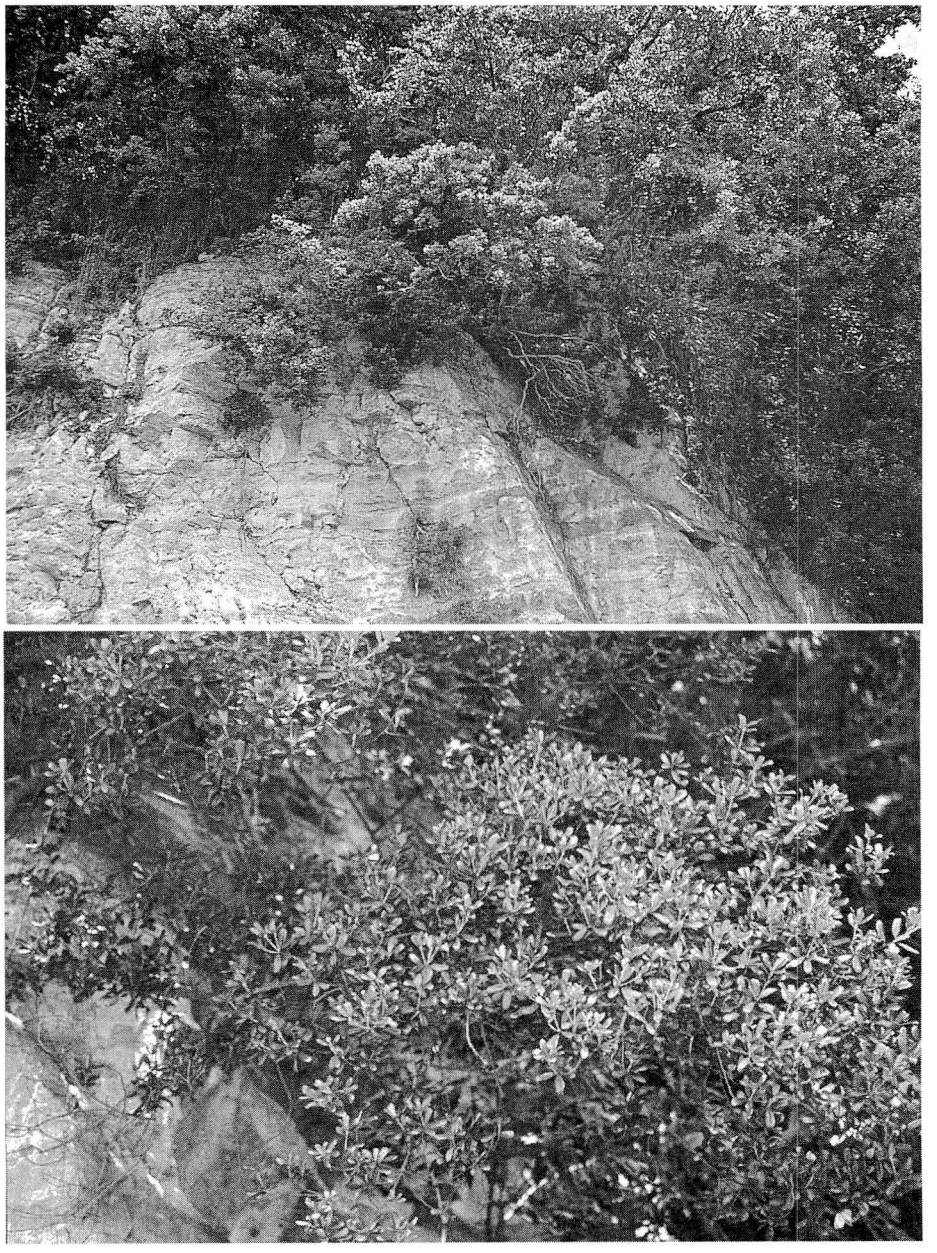
一方，2001年の横須賀植物会の調査報告（八田羽 2002）では，「ウバメガシはかなりの株数」と記されており，今回の調査ではそれを再確認した．このウバメガシは，教育隊の建物の背面に位置し，岩崎山南側の崖の上から斜面にかけて大小約50株が群落状態で広く生育し，安定した個体群を維持していると推定された．さらに岩崎山は房総半島の自生地2ヶ所よりも緯度が高いので，ウバメガシの北限地とみなされる（原ほか 2004）．

1882（明治15）年に刊行された2万分の1フランス式彩色地図（日本地図センター 1996）によれば，岩崎山の南西部は小田和湾に突き出し，海岸線に接している．まさにその海食崖が今回のウバメガシ自生地であり，伊豆半島などの自生地の生育環境とよく似ている．岩崎財閥の別荘地から日本海軍，米軍の管理を経て，山の周辺は埋め立てられたものの，山自体はほとんど手付かずで残され，とくにウバメガシの生育環境は崖地であったため，あえて伐採されることもなかったと推測される．加えて，1966年の大谷・柴田両先生の調査により，岩崎山の自然保護が促され，幸いにも北限のウバメガシが残されてきた．

城ヶ島赤羽根崎　桝田（1957）によれば，城ヶ島南側の赤羽根崎西側斜面に，高さ30cm～200cmまでの5株が見られ，自生とみなされた．その後も，神奈川県植物誌調査会の鈴木一喜氏，大場達之氏からも馬の背洞門付近にあると聞いていた．しかし，尾根や斜面にモチノキなどはあるものの，最近の調査ではウバメガシは見つからず，周囲の状況から枯死したものと推定される．

浦賀東叶神社　東叶神社社叢林のウバメガシはよく知られている（石渡 1986）．今回の調査では「勝海舟断食の地」の周囲に3本の大きなウバメガシが見られた．海岸林をなすウバメガシとしては異例の，高さ10m以上の株であり，生育状況からみて，これまでにも推測されたように（大谷 1972），植栽と推測される．

この横須賀市岩崎山のウバメガシ群落の詳細な



岩崎山南面海食崖上のウバメガシ（横須賀市御幸浜，2003年6月6日撮影）．

調査結果は，房総半島や伊豆半島の自生地と比較され，報告された（原ほか 2004）．調査をされた原正利氏，磯谷達宏氏，内山慶之氏，自衛隊への連絡でお世話になった相澤エイ子さん，調査に協力いただいた横須賀教育隊広報部星野氏（一曹），新聞記事や 2001 年の調査記録をお知らせいただいた西山清治氏・八田羽榮一氏（横須賀植物会），またその折の標本を寄贈された（故）山田友久氏に深謝する．

引用文献

八田羽榮一 , 2002. 海上自衛隊横須賀教育隊敷地内の植物調査報告 . 植物観察会・学習会記録，平成 13(2001) 年度 , pp. 40-43. 横須賀植物会 .

原正利・尾崎煙雄・大場達之 , 2000. 分布北東限のウバメガシ林の種組成と構造 . 千葉中央博自然誌研究報告 , 6(1): 47-52.

原正利・磯谷達宏・内山慶之・大森雄治 , 2004. 分布北限となる三浦半島小田和湾のウバメガシ林 . 千葉中央博自然誌研究報告 , 8(1): 25-30.

石渡治一 , 1986. 歩いて回る横須賀の植物 - 横須賀文化財シリーズ第 3 集 -. 横須賀市教育委員会 .

桝井孝 , 1958. 三浦半島に分布するウバメガシ . 採集と飼育 , 20(6): 177-180, 183.

日本地図センター , 1996. 明治前期測量 2 万分の 1 フランス式彩色地図―第一軍管地方ニ万分の一迅速測量原図覆刻版―，神奈川県葉山町，横須賀市西部地区，091 神奈川県相模国三浦郡武村林村和田村高円坊村 .

大野啓一 , 1998. ウバメガシの東限 . 千葉県植物誌資料 , (13): 90-91.

大谷茂 , 1972. 横須賀市の天然記念物 . 横須賀市教育委員会社会教育課編「図録横須賀の文化財」, pp. 21-27.

大谷茂・柴田敏隆 , 1971. 武山自衛隊内岩崎山の自然 . 横須賀市博館報 , (16): 19-20.

山井廣・木村陽子・大場達之 , 1998. 千葉県のイブキとウバメガシ . 千葉県植物誌資料 , (13): 91-92.

鎌倉市七里ガ浜のエビアマモの個体数の推定

（大森雄治）

エビアマモ *Phyllospadix japonicus* Makino は日本とその周辺地域の沿岸に固有な海草で，国の基準では準絶滅危惧に指定されている．太平洋岸では，茨城県から三重県に分布し，その分布域はアマモやコアマモなどほかの海草に比べて大変狭い．最近の調査では，北限がやや北上し，北茨城市五浦海岸であることが判明したが（中庭 2005），同じく岩礁潮間帯から潮下帯に生育し，千葉県以北に分布するスガモと同様，分布や生育状況は未だ不明である（相生 1987）．神奈川県においてもエビアマモの唯一の産地である鎌倉市七里ガ浜地先では（大森 1992），その分布域や個体数はまだよくわかっていない．筆者は，調査会会員のご協力の下で，2005 年 3 月から，エビアマモの分布や生態の調査を行ってきた．そのうち 5 月 24 日と 7 月 21 日には調査区を設けてパッチ数を数え，七里ガ浜の個体群（図 1）の個体数の推定を試みた．

七里ガ浜の干潮時の波打ち際から海岸線に対して垂直方向（南北方向）に，ほぼ岩礁の先端まで，密度の低い分布東側（稲村ガ崎側）の縁で 10 m × 105 m（5 月 24 日），密度の高い分布の中央付近で 5 m × 70 m（7 月 21 日）の帯状の調査区（ベルトトランセクト）を設けて分布状況を観察した．基盤は多くは岩盤だが，一部岩盤に砂が薄く堆積し，海岸線に近いところでは，砂底にエビアマモが生育しているように見える場所もあった．縁の調査区では調査区内にミル，ワカメ，ヘライワヅタが見られ，沖合い 100 m 付近ではアラメ，ワカメ，フサイワヅタが多く，中央部の調査区では波打ち際から 30 m ほどはアラメが多く，さらに沖合いではヘライワヅタやミルが多く見られた．

エビアマモとスガモは岩礁上をはう根茎によって栄養繁殖を行い，古い根茎は枯れるので，個体の識別が困難である．ここでは根茎の塊（パッチ）数を数え，根茎のサイズを計測し，花序の確認を行った（図 2）．多くの場合このパッチは 1 個の種子に由来する 1 個のクローンとみなされる．

図 1. エビアマモと様々な海藻（2005.4.27，鎌倉市七里ガ浜地先）.

図 2. エビアマモの雌花序（→）（2005.4.27，鎌倉市七里ガ浜地先）.

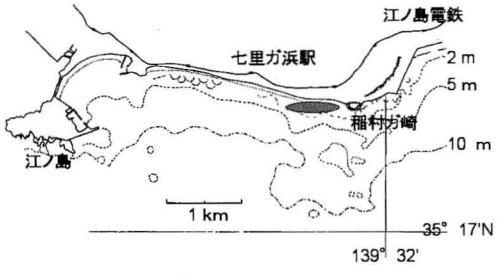


図 3. 今回の調査で確認されたエビアマモの分布域.

計測の結果，分布域の縁で 34 パッチ（根茎サイズの最大は 60 cm × 45 cm，このうち雌株は 10 パッチ），中央部で 78 パッチ（根茎サイズの最大は 90 cm × 40 cm，すでに果序も脱落しており，雌雄の識別は不可）を数えた．すでに花期を過ぎていたため雄株は確認できなかった．

七里ガ浜の稲村ガ崎寄りの海岸線に沿って（図 3），東西およそ 1000 m にわたって分布し，沖合い 100 m までの水深 2 m までのおもに潮間帯下部に生育すると仮定すると，密度が低い数値をもとにした総パッチ数は約 3000 パッチ，密度の高い数値をもとにした総パッチ数は 20000 パッチと推定される．また，雌個体の比率は約 30%であった．

エビアマモは潮間帯以深にも生育するので（Miki 1934），分布域の確認にはさらに潜水調

査なども必要である．今後は雌雄比なども確認し，かつて片瀬（1938 年 5 月 1 日，久内採集，TI）や城ヶ島（1950 年 5 月 30 日，古沢採集，TI）の標本が残され，由比ガ浜の目撃記録（調査会会員の杉山さん）もあるので，さらに周辺地域の調査も行いたい．

調査は，5 月 24 日に神奈川県植物誌調査会会員の金井さん，木田さん，中山さん，早川さん，7 月 21 日に上条由宇さん，木田さん，小久保さん，中山さんにご協力いただきました．感謝いたします．

文献

相生啓子 , 1987. 岩礁潮間帯の顕花植物 - スガモ - の生態学的研究．大槌臨海研究センター報告 , (13): 7-10.

Miki S., 1934. On the Sea-grasses in Japan (I) *Zostera* and *Phyllospadix*, with special reference to morphological and ecological characters. Bot. Mag. Tokyo, 47: 842-862, pl. 3.

中庭正人 , 2005. 太平洋沿岸におけるエビアマモの北限地の現状 . 水草研究会誌 , (83):6-7.

大森雄治 , 1992. エビアマモの分布と相模湾における開花期 . FLORA KANAGAWA, (33): 356-357.

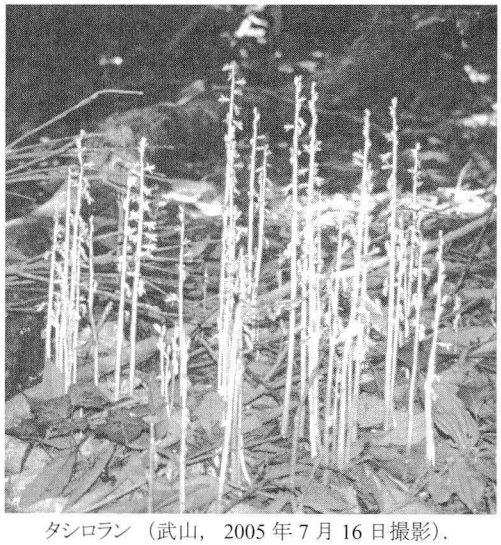
横須賀市南部，武山の植物相調査の概要

（三浦ブロック会員・三浦半島植物友の会）

三浦半島には，二子山，大楠山，武山の三つの丘陵があり，その最南部の丘陵地が武山である．南側の麓はみかん畑とキャベツなどの畑地がほとんどであるが，3 つの山頂には武山不動尊（武山），砲台跡（砲台山），浅間神社（三浦富士）があり，山腹はマテバシイの植林や，スダジイやタブノキなどの照葉樹の多い雑木林でおおわれており、特別緑地保全地区と首都圏近郊緑地保全区域に指定されている．1960 年代までは山腹に茅場などもあったが，今では見られない．この地域ではこれまで，クロムヨウラン（大谷 1979），ムカゴサイシン（星・勝山 1992）など神奈川県では分布の限られた種が記録されたが，周年にわたるまとまった調査は行われてこなかった．

三浦ブロックや横須賀植物会会員などからなる調査チームは，2003 年から植物誌の補足調査と花暦調査を継続し，三浦半島の植物相の把握に努めている．2005 年にはこの武山を 2 月からほぼ毎月 1 回調査し，これまでに約 400 種を記録した．夏にはタシロラン，秋にはアキザキヤツシロランやクロヤツシロランの大量発生を観察し，あわせて数種のハナワラビ類やナギラン，カゲロウランなど様々な林床植物を見出すことができた．

カゲロウラン（武山，2005 年 2 月 20 日撮影）．



タシロラン（武山，2005 年 7 月 16 日撮影）．

ナギラン（武山，2005 年 3 月 12 日撮影）．

とくに，神奈川県からは初めてハチジョウシュスラン（表紙参照）が記録され，三浦半島同様最近発見された房総半島南部（千葉県史料研究財団編，2003）や伊豆諸島と三浦半島との植物相のつながりの密接さを再認識した．問い合わせは横須賀市自然・人文博物館の大森雄治まで．

文献

千葉県史料研究財団編，2003. 千葉県の自然誌 別編 4 千葉県植物誌（県史シリーズ 51）. 1181pp. 千葉県．

星寛治・勝山輝男，1992. 三浦半島産ムカゴサイシン．神奈川県自然誌資料，(13): 89-92.

大谷茂，1979. 神奈川県植物分布資料 (9). 横須賀市博物館館報，(25): 1-3.

カワラノギク 2005 年も相模原市で咲く

（秋山幸也）

FLORA KANAGAWA（No.59, 2005）において，筆者はカワラノギクが 2004 年秋，相模原市内の相模川左岸高水敷に開花し，これが市内の確実な開花記録としては約 10 年ぶりであることを報告した．翌年の 2005 年も，同地区で開花を確認したので報告する．

カワラノギクが開花したのは，前年と同様，相模原市大島の通称「神沢河原」である．発見の経過も前年同様で，相模原市職員の内田英樹氏らによって発見された．株数は 2 株で，前年の地点から約 200 メートル上流側に 1 株と，約 250 メートル下流側に 1 株と別々に咲いた．

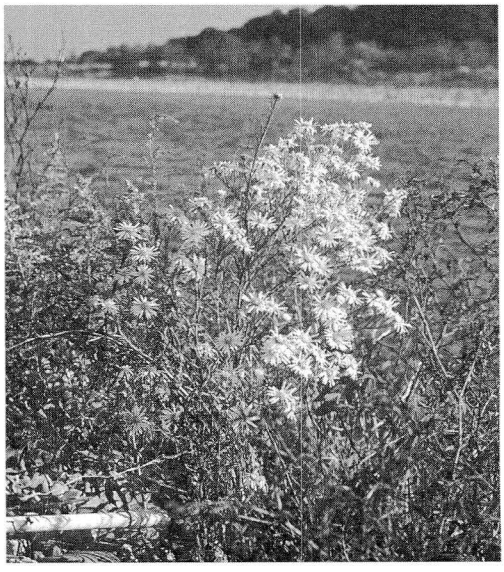
上流側の株は比較的大きな株で，頭花も 80 個を超えていた．場所は高水によって頻繁に冠水するであろう砂礫地内で，そのためか周囲はコセンダングサやセイタカアワダチソウが点々と生育する程度であった．

下流側の株が開花した場所は，高水敷の中でも水面比高はやや高く乾燥しており，周囲はコセンダングサとシナダレスズメガヤに被われていた．この株の頭花数はあまり多くなく，40 個程度であった．近くには，コセンダングサに埋もれつつもカワラハハコが数株咲いていた．

また，これらの株とは別に，下流側に約 4 キロメートル離れた相模原市田名望地の高水敷で，相模原植物調査会の川崎香代氏によって 1 株の開花が確認された．頭花が非常に多い株で，砂礫地の水際から水面にせり出すように咲いていた．

以上のように，2005 年は自然分布によると思われる株が 3 株開花した（いずれも，シュートの一部分を採集し標本とした）．これら 3 株は自家不和合性が強いようで，痩果はあまり多く採集できなかった．しかし，前年の栽培株から採種した痩果が多数確保できており，これらも合わせて今年春から，現地保全区域（2004 年開花株の周囲 10 メートル四方）への播種及び，引き続いての苗栽培を行いたい．シードバンクを形成しないという性質（Washitani et al. 1997）もあり，現地への播種のみでは高水による消失の恐れがあることに加え，渇水や日照不足など，カワラノギクの生育に不適な事態が生じやすい．そこで，苗（ロゼット）を現地へ定植するのが最も確実な方法であり，今後の保全策は，現地播種と苗の移植の両面で行っていくことが必要であろう．

なお，相模原市内における標本上の開花記録は，冒頭に述べたとおり約 10 年ぶりとなる．しかし，神沢河原をフィールドとするバードウォッチャーなどの話によると，実際は毎年とまで言わないが，“空白”の 10 年の間も少数が細々と咲いていたようである．その間に大規模な流程の変化なども無いことから，突然 10 年ぶりに咲き出したと考えるよりも自然でろう．蛇足かもしれないが，情報として付記する．



2005 年 11 月 10 日，田名望地での開花株．秋山撮影．

標本 SCM019234 相模原市大島神沢河原 2005.11.8 秋山幸也 ; SCM019235 相模原市田名望地 2005.11.8 川崎香代 .

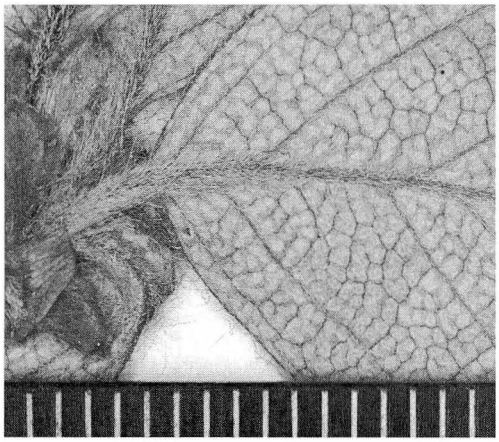
文献

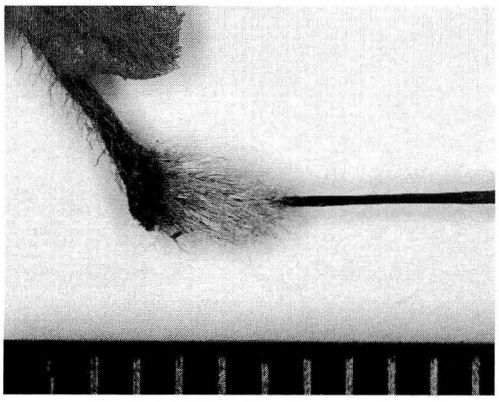
Washitani,I., A.Takenaka, N.Kuramoto and K.Inoue, 1997. *Aster kantoensis* Kitam.,an endangered flood plain endemic plant in Japan: its ability to form persistent soil seed bank. Biological Conservation, 82: 67-72.

コバノミツバツツジが藤野で採集された

（勝山輝男）

コバノミツバツツジ *Rhododendron reticulatum* D.Don ex G.Don は静岡県以西に分布するミツバツツジの仲間で，神奈川県では箱根の須雲川流域で目撃情報（井上・中村・高橋 1992 須雲河流域の植物相 箱根線 No.391-447 地域環境事前調査委託報告書 東京電力）がありましたが，





上：葉柄や葉の下面に褐色の毛が密生（KPM-NA0124286），下：雌しべの子房に白毛が密生するが，花柱は平滑（KPM-NA0124291）．

標本が残されていないため，神奈川県植物誌 2001 では神奈川のフローラからは除外しておきたいと書かれています．2005 年春に菅澤桂子さんが，藤野町名倉で採集され，神奈川県の分布が明らかになりました．雄しべが 10 本あり，子房に白毛が密生する点はトウゴクミツバツツジやキヨスミミツバツツジと同じですが，花柱に腺毛がない点でトウゴクミツバツツジと異なり，葉柄や下面脈上に淡褐色毛が多い点でキヨスミミツバツツジとも異なります．

標本 津久井郡藤野町名倉 2005.4.13 菅澤桂子 KPM-NA0124291; 同 2005.5.1 KPM-NA0124286.

ヒトツノコシカニツリ

（木場英久）

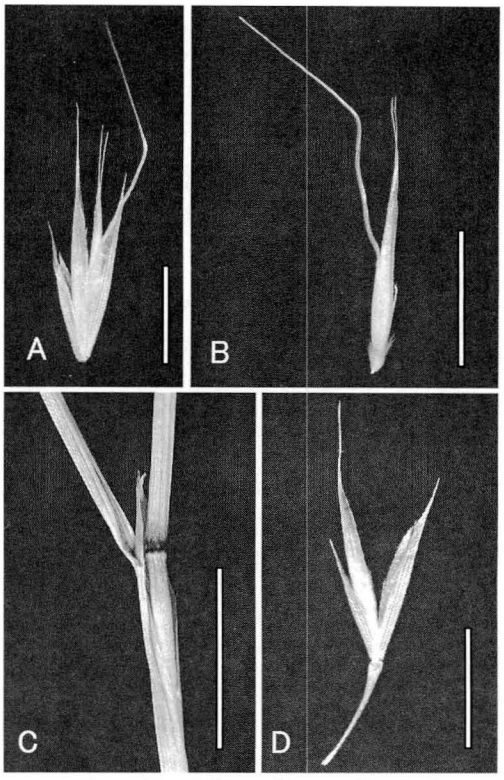
ヒトツノコシカニツリ *Ventenata dubia* (Leers) Coss. というイネ科の日本新産の帰化植物が神奈川県で記録されました．この植物については県立博物館の紀要（木場ほか 2005）で発表したのですが，調査会のみなさんには顛末を含めて紹介しようと思います．

この種は，植物誌 2001 のための調査のときに，北川淑子さんが 1998 年に横浜市青葉区の造成地で，金井和子さんが 1999 年に秦野市の耕作地の脇で採集されていたのですが，種名がわからなかったので植物誌には載せられませんでした．

この植物は，苞穎が膜質で，小穂は複数の小花を含み，護穎の背からねじれた芒が出ることなどからカニツリグサ属 *Trisetum*，ミサヤマチャヒキ属 *Helictotrichon* とも，オオカニツリ属 *Arrhenatherum* あたりの植物であるとも思われたのですが，第 1 小花には護穎背面から出る芒がなく，子房の上部にも毛がなかったので，どの属にもぴったり当てはまるものがありませんでした．日本新産の帰化植物であるというところまではわかったのですが，これらの属の外国産の種をいくら検討しても解決に至らず，停滞してしまいました．

その後，2003 年になって，仙台市で庄子邦光さんがカンツバキの植え込みに生えていたものを採集し，*V. dubia* と同定した標本を，確認のためにと県博に送ってこられました．確認するだなんておこがましい．庄子さんに正解を教えてもらったのです．第 2 小花以上の小花が熟して脱落し

ヒトツノコシカニツリ（KPM-NA0124092）.



A: 小穂 , B: 第 2 小花 , C: 葉舌 , D: 第 1 小花 .
スケールは， 5mm.

たのちも， 第 1 小花は苞穎に包まれて宿存することや， 護穎先端が芒状にとがること， すべての小穂の第 1 小花に芒がないことなどの形態が一致し， 東京大学総合研究博物館に収蔵されている標本とも比較して， 庄子さんの同定が正しいことを確認しました． *Ventenata* は日本新産の属で，カニツリグサ属に近縁であり， 第 1 小花が他の小花より長く花序に残るという明瞭な特徴をもっているので， 和名をヒトツノコシカニツリとしました． この種はヨーロッパ原産ですが， 北アメリカにも帰化し， 分布を拡大しており， 日本にも定着する恐れが高いと思います． 以下に形態を記述します．

一年草． 稈は粗渋． 基部から 2-3 節目で分枝し， 小さな花序を出すことがある． 節は黒く， 無毛． 葉舌は膜状で， 高さ約 4mm で， 鋭頭． 円錐花序は長さ 15-25cm で， 散開する． 小穂は 2-4 小花からなる． 苞穎は脈上がざらつき，縁は透明な膜質で， 先端は尾状に尖る． 第 1 苞穎は 5-7 脈， 長さ約 7mm で， 第 1 小花より短い． 第 2 苞穎は 7-9 脈で， 長さ約 10mm. 第 1 小花では護穎の先端が徐々に細くなり芒状になるが， 背面に芒はない． 護穎本体の長さは約 10mm. 第 2 小花以上の小花では護穎の先端が二つに分かれて芒状になり， それとは別に背面中部から出るねじれた芒がある． すべての小花は両性で， 護穎は縁が透明膜質で， 基盤に毛が束生する． 第 2 小花以上は， 熟すと小花の基部と小軸の間で関節して散布されるが，第 1 小花は苞穎や小穂の柄とともに散布される．

標本

横浜市青葉区あざみ野南 Jun. 11, 1998 北川淑子 KPM-NA0124092; 秦野市曽屋 Jun. 14, 1999 金井和子 KPM-NA0124093; 宮城県仙台市青葉区南吉成 Jul. 5, 2003 庄子邦光 KPM-NA0124094.

ヒメコヌカグサを再発見

（木場英久）

ヒメコヌカグサ *Agrostis valvata* Steud. は、 湿地に生え、 東北の太平洋側、 関東以西に分布するイネ科の多年草である。 苞穎よりも大きい小花をつけるので他のヌカボ属植物と見分けるのは容易

ヒメコヌカグサ．勝山輝男氏撮影．

である。神奈川県では珍しい植物で、1995年の県レッドデータブックでは減少種にされている。この種は仙石原で1983年に科博の館岡亜緒先生が採集された標本を最後に、しばらく確実な記録がなく、正確な生育場所もわからなくなっていた。2004年に現地を見に行ったときには、花期を過ぎていたため見ることができなかった。

今回、2005年6月5日に再調査に出かけたが、歩き回ってもなかなかみつからない。日も傾きかけ、前年の二の舞かと思い始めたころになって発見できたので感激もひとしおだった。22年ぶりの記録である。同じような環境のところを周囲で探してみたが、ヒメコヌカグサは10株ほどしか、みあたらなかった。何かひとつのできごとで神奈川県から消えてしまいそうな植物だと思った。

標本 足柄下郡箱根町仙石原 Jun. 6, 2005 木場英久・勝山輝男 KPM-NA0124173.

テッポウユリ類の帰化植物

(木場英久)

神奈川県植物誌では「シンテッポウユリ」と呼んでいるテッポウユリ類の帰化植物が，山梨県，滋賀県，大阪府，愛媛県など各地で増えているようで，2005年の夏ごろに帰化植物友の会のメーリングリストで話題になりました．話題になるのはいいのですが，これらの情報をメーリングリストに寄せた方々は，この帰化植物のことを「タカサゴユリ」と呼ぶのです．道路わきの法面の吹き付けや石垣などに一面に生えて，葉が細く，外花被片の中肋の外側が紫を帯びることがあることなどから，おそらく神奈川県によくみられるシンテッポウユリと同じものを別の名前で呼ぶ問題が発生しているのです．

シンテッポウユリは少数派

この帰化植物を1988年や2001年の神奈川県植物誌ではシンテッポウユリという和名で呼んでいますが，この植物（以後「問題の植物」とします）をシンテッポウユリと呼んでいる文献は，案外多くありません．他には千葉県の植物誌である『千葉県の自然誌』（2003年）しか知りません．たとえば，『日本帰化植物写真図鑑』（2001年 農村文化社）や『日本の帰化植物』（2003年 平凡社）ではタカサゴユリとしていますし，そのほか，手近にあったものだけで，『改訂鹿児島県植物目録』（1986年），『新版大分県植物誌』（1989年），『徳島県植物誌』（1990年），『改訂三重県帰化植物誌』（1997年），『広島県植物誌』（1997年，文献記録としてテッポウユリも掲載），『栃木県高等植物目録改訂版』（2002年）でも「問題の植物」のことをタカサゴユリと呼んでいます．

これでは「シンテッポウユリ」を強烈に弁護しないと，多数派の論理に押しやられてしまいそうな勢いです．まずは，『神奈川県植物誌2001』で「シンテッポウユリ」を使うにあたっては，多数決では片付けられないような理由があったので，紹介したいと思います．

シンテッポウユリとは

私は問題の植物は園芸植物のシンテッポウユリの一型が帰化したものだと考えています．シンテッポウユリとは，テッポウユリとタカサゴユリとの雑種や，さらに戻し交配や，自家受精などを通して作られた多数の園芸品種の総称です．ちなみに，片親のタカサゴユリは，もともと台湾に自生する植物で，日本には1924年（大正12年）以降，種子が導入され，切花用にさかんに栽培されました（清水基夫 1971年『日本のユリ』誠文堂新光

社 p. 219）．葉が細い植物で，夏咲きです．ふつうは花被の中肋が紫を帯びるようです．もう片親のテッポウユリは，南西諸島に自生する植物で，葉が広く，春から初夏にかけて花を咲かせる植物です．花被片は紫色を帯びないようです．清水基夫（1987 年『日本のユリ』誠文堂新光社 p.157）によると，短期間で開花するタカサゴユリの特徴と白花で広葉のテッポウユリの特徴をあわせもつものをつくるために，1928 年ころから交配を始め，シンテッポウユリは約 10 年をかけて作られたようです．同書にはその後も次々と作り出されたたくさんの品種が列挙されています．また，清水基夫（1971 年 p.219）はタカサゴユリの栽培について「新テッポウユリができたので，現在切花栽培は少なくなりました」としています．

「シンテッポウユリ」としたわけ

純粋なタカサゴユリが本土に持ち込まれたのは 1924 年ですが，問題の植物が増えてきたのは早くとも 1970 年代になってからです．問題の植物が帰化したもっとも古い記録は，おそらく 1983 年の松田町の東名高速のインターチェンジ法面の記録です（岩田勝之助 1984 レポート日本の植物 23: 23）．近年になって増えたのは，品種改良によって野生化できるような系統が作られたからではないかと想像します．たとえば，もしも病害虫に強いとか，寒さに強いような性質が付け加われば，それまで野生化できなかったものが，急に分布を広げることができそうですよね．純粋なままのタカサゴユリがそのままで野生化できる性質を持っているのだったら，もっと早くに帰化植物として広がっていいと思います．

また，台湾のタカサゴユリは『中国植物誌』（1980 年）や Flora of China（2000 年）では，茎の高さが 20-55cm となっています．この帰化植物の方は，テッポウユリのようにもっと大きいものもあります．花被片の中肋が紫を帯びる度合いや，葉の幅も個体によって差異が大きいと思います．このことからも問題の帰化植物は純粋な台湾のタカサゴユリとは違うと思います．

おもにこれらの理由から，問題の植物は純粋なタカサゴユリではないと考えた方が自然だと思い，人工物であるシンテッポウユリの一型であると判断しました．メーリングリストの参加者の方々から，別の文献ではタカサゴユリの高さはもっと高く書かれていますし，急に分布を広げた理由も，1970 年代から物流が盛んになったとか，高速道路網が広まったなど，急に人為が働いたためと考えることができるという指摘を受けました．

多様なタカサゴユリ派

問題の植物を「タカサゴユリ」と呼ぶのがよいと考えている人の話を聞くと，さまざまな立場の人がいることがわかりました．ここまでなるべく公平な立場で書いてきましたが，しばらくのあいだ明確にシンテッポウユリ派の立場から，タカサゴユリ派の多様な意見や立場を見ていきたいと思います．

ひとつ目は，「慣れ親しんだタカサゴユリという和名を変更して欲しくない」という意見です．全国に流通する本で扱われているし，和名には命名規約のような基準もないのだから，慣れ親しんだ名前を使うのがよいのではないかというものです．しかし，問題の植物が純粋なタカサゴユリでないとしたら，台湾に自生する植物と日本各地に帰化する人工物を同じ名前で呼ぶことになってしまいます．和名の変更は最小限にすべきと思いますが，別物となれば変更すべきです．つまり慣れ親しんだどうかよりも，純粋なタカサゴユリかどうかの方が優先されるべき問題だと思います．

ふたつ目は，「現在，栽培されるシンテッポウユリは葉の幅や花の色などが違うので，問題の植物とは別の名前を使いたい」という意見です．問題の植物は葉が細く，多くの個体で花被片の中肋の外側が紫色を帯びます．ところが栽培されているシンテッポウユリは葉の幅が広く，純白の花をつけます．それで，今主流の品種を栽培している人にとっては，問題の植物をシンテッポウユリと呼ぶのは違和感があるのです．しかし，シンテッポウユリとは，雑種 1 代目だけでなく，戻し交雑体も含めた広い範囲を指す概念のようです．神奈川県博にはユリの研究をされた清水基夫氏のコレクションがあるのですが，このシンテッポウユリの標本を見ると，葉の幅も，花被の色も多様です．シンテッポウユリの形態変異の範囲はひろく，タカサゴユリの変異を含んでいて，この 2 者は形態からは区別ができません．同氏の

本にも細葉や広葉のシンテッポウユリの品種が記されています（1987年 p.158）．かつては多様な品種があったのに，現在主流な園芸品種ではないという理由で，問題の植物をシンテッポウユリと呼ばないというのは成り立たないと思います．古代稲を見て，草丈が高く，芒が長く，籾が紫色をしていても，イネの品種程度の違いであるとわかれば，イネと呼ぶのが当然でしょう．

第3は，「純粋なタカサゴユリが帰化している」と考えている方々です．問題の植物の花被の中肋外側が，個体によって紫を帯びたり，帯びなかったりするのはどのように考えるのでしょうか．

次は，「暫定的にタカサゴユリと呼ぶべき」という立場です．先日，『日本の帰化植物』のユリ科の著者である岐阜大学の高橋弘さんと話す機会があり，なぜこの本で「タカサゴユリ」とされたのかについて遠慮なくお聞きしてしまったのですが，問題の植物をタカサゴユリとしている文献（『日本帰化植物写真図鑑』のことだと思います．この著者が，なぜタカサゴユリを使われたのか，是非知りたいところです．）がすでにあり，また，花被に紫斑があるなど形態的にタカサゴユリによく似ていて，それと区別する明確な根拠がなかったから，現時点ではタカサゴユリとするのが妥当だろうと考えたというお答えでした．余談ですが，高橋さんは問題の植物をよく観察されているようで，訪花昆虫が少ないとか，葯と柱頭が同じあたりにあるので，かなりの頻度で自家受粉をしているのだろうともおっしゃっていました．

このほかに「問題の植物が雑種由来であるとしてもタカサゴユリと呼ぶべきだ」という考えがあってもよいと思っていました．たとえば，在来のタンポポのゲノムを取り込んだセイヨウタンポポも，セイヨウタンポポと呼ばれることがありますが，これはゲノムを取り込むという性質を含めてセイヨウタンポポであると考えるからではないでしょうか．このような特殊な理由があって，問題の植物をタカサゴユリとしている方がいたら，その意見を聞きたいと思っていたのですが，メーリングリストには現われませんでした．

解決に向けて

自分に都合のよいように論を進めてきましたが，ここで公平に考え直してみると，タカサゴユリ派にもシンテッポウユリ派にも，たいした根拠はないように思います．自生植物であるタカサゴユリとテッポウユリのアイソザイムを調べたら，遺伝的に分化していたという研究例（Hiramatsu et al., 2001. Amer. J. Bot., 88: 1230-1239）があります．ここまでわかっているのですから，「問題の植物」が純粋なタカサゴユリなのか，それともテッポウユリとの雑種なのかを遺伝的に調べることができれば，解決できる問題です．また，何か進展がありましたら紹介したいと思います．

日本のスゲ，ついに刊行

（田中徳久）

勝山輝男（著）：ネイチャーガイド 日本のスゲ A5判376頁．2005年12月31日．文一総合出版．ISBN4-8299-0170-5．定価￥5,040.

日本産スゲ属植物が、変種を含めてほぼすべて、生態写真と果胞、痩果、基部の鞘の写真で紹介されています。本文は、見開きの左右に1種ずつが掲載され、最上段にはその種が属する節とその解説が簡潔に述べられていて、種ごとの写真は基本的に実際に生育している様子が分かる植物体全体、雄小穂または雌小穂、基部の鞘、果胞があり、細かい部分はルーペで観察できる範囲で拡大されているので絵あわせで確認することも可能です。

調査会会員の皆様は著者割引での購入（1冊4,100円くらい）が可能です。総会にも何冊か持ち込むつもりですが、十分な数が用意できるか分かりません。何かの機会に県博に来られた際に著者に直接申し出ていただければと思います。

総会のお知らせ

（事務局）

2006年度の総会は日本大学生物資源科学部（http://www.brs.nihon-u.ac.jp/index.html）の本館81教室で、4月22日の午後1時30分から開催します．最寄駅は小田急江ノ島線の六会日大前駅です．駅の西側に出て，線路に沿って南に歩くと約3分で門に着きます．万障お繰り合わせの上，お集まりください．